

これは、私が小さいときに、村の茂平というおじいさんからきいたお話です。

むかしは、私たちの村のちかくの、中山というところに小さなお城があった、中山さまというおとのさまが、おられたそうです。

その中山から、少しはなれた山の中に、「ごん狐」という狐がいました。

ごんは、一人ぼっちの小狐で、しだの一ぱいしげった森の中に穴をほって住んでいました。そして、夜でも昼でも、あたりの村へ出てきて、いたずらばかりしました。はたけへ入って芋を

ほりちらしたり、菜種がらの、ほしてあるのへ火をつけたり、百姓家の裏手につるしてあるとんがらしをむしりにとって、いったり、いろんなことをしました。

或秋のことでした。二、三日雨がふりつづいたその間、ごんは、外へも出られなくて穴の中にしゃがんでいました。

雨があがると、ごんは、ほっとして穴からはい出ました。空はからっと晴れていて、百舌鳥の声がきんきん、ひびいていました。

ごんは、村の小川の堤まで出て来ま

した。あたりの、すすきの穂には、まだ雨のしずくが光っていました。川は、いつもは水が少いのですが、三日もの雨で、水が、どっとましていました。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきや、萩の株が、黄いろくにごった水に横だおしになって、もまれていきます。ごんは川下の方へと、ぬかるみみちを歩いていきました。

ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、そうっと草の深いところへ歩きよって、そこからじつとのぞいてみました。

「兵十だな」と、ごんは思いました。  
兵十はぼろぼろの黒いきものをまく  
し上げて、腰のところまで水にひた  
りながら、魚をとる、はりきりとい  
う、網をゆすぶっていました。はち  
まきをかけた顔の横っちょように、  
まるい萩の葉が一まい、大きな黒  
子みたいにへばりついていました。

しばらくすると、兵十は、はりき  
り網の一ばんうしろの、袋のよう  
になつたところを、水の中からも  
ちあげました。その中には、芝の  
根や、草の葉や、くさった木ぎれ  
などが、ごちやごちやはいって  
いましたが、でもところどころ

ろ、白いものがきらきら光っています。  
それは、ふというなぎの腹や、大きな  
きすの腹でした。兵十は、びくの中へ、  
そのうなぎやきすを、ごみと一しよに  
ぶちこみました。そして、また、袋の  
口をしばって、水の中へ入れました。  
兵十はそれから、びくをもって川か  
ら上りびくを土手において、何を  
さがしにか、川上の方へかけていきま  
した。

兵十がいなくなると、ごんは、ぴよ  
いと草の中からとび出して、びくのそ  
ばへかけつけました。ちよいと、いた  
ずらがしたくなったのです。ごんはび

くの中の魚をつかみ出しては、はりきり網のかかっているところより下手の川の中を目がけて、ぽんぽんなげこみました。どの魚も、「とぼん」と音を立てながら、にごった水の中へもぐりこみました。

一ばんしまいに、太いうなぎをつかみにかかりましたが、何しろぬるぬるとすべりぬけるので、手ではつかめません。ごんはじれっなくなっ、頭をびくの中につっこんで、うなぎの頭を口にくわえました。うなぎは、キュツと言っ、ごんの首へまきつきました。そのとたんに兵十が、向うから、

「うわアぬすと狐め」と、どなりた  
てました。ごんは、びっくりしてとび  
あがりました。うなぎをふりすててに  
げようとしたが、うなぎは、ごん  
の首にまきついたままはなれません。  
ごんはそのまま横つとびにとび出し  
て一しょうけんめいに、にげていきま  
した。

ほら穴の近くの、はんの木の下でふ  
りかえって見ましたが、兵十は追っか  
けては来ませんでした。

ごんは、ほっとして、うなぎの頭を  
かみくだき、やつとはずして穴のそと  
の、草の葉の上にのせておきました。

二

十日ほどたって、ごんが、弥助とい  
うお百姓の家の裏を通りかかります  
と、その、いちじくの木のかげで、  
弥助の家内が、おはぐろをつけていま  
した。鍛冶屋の新兵衛の家のうらを通  
ると、新兵衛の家内が髪をすいていま  
した。ごんは、  
「ふふん、村に何かあるんだな」と、  
思いました。

「何だろう、秋祭かな。祭なら、太  
鼓や笛の音がしそうなものだ。それに



第一、お宮にのぼりが立つはずだが」

こんなことを考えながらやって来ますと、いつの間にか、表に赤い井戸のある、兵十の家の前へ来ました。その小さな、こわれかけた家の中には、大勢の人があつまっていました。よそいきの着物を着て、腰に手拭をさげたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きな鍋の中では、何かがぐずぐず煮えていました。

「ああ、葬式だ」と、ごんは思いました。

「兵十の家のだれが死んだんだろう」

お午がすぎると、ごんは、村の墓地へ行って、六地藏さんのかげにかくれていました。いいお天気で、遠く向うには、お城の屋根瓦が光っています。墓地には、ひがん花が、赤い布のようにさきつづいていました。と、村の方から、カーン、カーン、と、鐘が鳴って来ました。葬式の出る合図です。やがて、白い着物を着た葬列のものがやって来るのがちらちら見えはじめました。話声も近くなりました。葬列は墓地へはいつて来ました。人々が通ったあとには、ひがん花が、ふみおられていました。

ごんはのびあがって見ました。兵十が、白いかみしもをつけて、位牌をささげています。いつもは、赤いさつま芋みたいな元気のいい顔が、きょうは何だかしおれていました。

「ははん、死んだのは兵十のおっ母だ」

ごんはそう思いながら、頭をひっこめました。

その晩、ごんは、穴の中で考えました。

「兵十のおっ母は、床について、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで兵十がはりきり網をもち

出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎをとって来てしまった。だから兵十は、おっ母にうなぎを食べさせることができなかった。そのままおっ母は、死んじやったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもいながら、死んだんだろう。ちょッ、あんないたずらをしなけりやよかった。」

三

兵十が、赤い井戸のところで、麦をいっていました。

兵十は今まで、おっ母と二人きりで、  
貧しいくらしをしていたもので、おっ  
母が死んでしまっっては、もう一人ぼっ  
ちでした。

「おれと同じ一人ぼっちの兵十か」  
こちらの物置の後から見ていたご  
んは、そう思いました。

ごんは物置のそばをはなれて、向う  
へいきかけますと、どこかで、いわし  
を売る声がします。

「いわしのやすうりだアイ。いきの  
いいいわしだアイ」

ごんは、その、いせいのいい声のす  
る方へ走っていききました。と、弥助の

おかみさんが、裏戸口から、

「いわしをおくれ。」と言いました。

いわし売は、いわしのかごをつんだ車を、道ばたにおいて、ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで、弥助の家の中へもってはいりました。ごんはそのすきまに、かごの中から、五、六ぴきのいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。そして、兵十の家の裏口から、家の中へいわしを投げこんで、穴へ向ってかけもどりました。途中の坂の上でふりかえって見ますと、兵十がまだ、井戸のところで麦をといでいるのが小さく見えました。

ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました。つぎの日には、ごんは山で栗をどっさりひろって、それをかかえて、兵十の家へいきました。裏口からのぞいて見ますと、兵十は、午飯をたべかけて、茶碗をもったまま、ぼんやりと考えこんでいました。へんなことには兵十の頬ぺたに、かすり傷がついています。どうしたんだろうと、ごんが思っていますと、兵十がひとりごとをいいました。

「一たいだれが、いわしなんかおれの家へほうりこんでいったんだろう

う。おかげでおれは、盗人と思われて、  
いなし屋のやつに、ひどい目にあわさ  
れた」と、ぶつぶつ言っています。

ごんは、これはしまったと思いました  
た。かわいそうに兵十は、いなし屋に  
ぶんなぐられて、あんな傷までつけら  
れたのか。

ごんはこうおもいながら、そつと物  
置の方へまわってその入口に、栗をお  
いてかえりました。

つぎの日も、そのつぎの日もごんは、  
栗をひろっては、兵十の家へもって来  
てやりました。そのつぎの日には、栗  
ばかりでなく、まつたけも二、三ぼん



もっていきました。

#### 四

月のいい晩でした。ごんは、ぶらぶらあそびに出かけました。中山さまのお城の下を通ってすこしいくと、細い道の向うから、だれか来るようです。話声が聞えます。チンチロリン、チンチロリンと松虫が鳴いています。ごんは、道の片がわにかくれて、じっとしていました。話声はだんだん近くなりました。それは、兵十と加助というお百姓でした。

「そうそう、なあ加助」と、兵十が  
いいました。

「ああん？」

「おれあ、このごろ、とてもふしぎ  
なことがあるんだ」

「何が？」

「おっ母が死んでからは、だれだか  
知らんが、おれに栗やまつたけなんか  
を、まいにちまいにちくれるんだよ」

「ふうん、だれが？」

「それがわからんのだよ。おれの知  
らんうちに、おいていくんだ」

「ごんは、ふたりのあとをつけていき  
ました。」

「ほんとかい？」

「ほんとだとも。うそと思うなら、あした見に来いよ。その栗を見せてやるよ」

「へえ、へんなこともあるもんだなア」

それなり、二人はだまって歩いていきました。

加助がひよいと、後を見ました。ごんはびくつとして、小さくなってたちどまりました。加助は、ごんには気がつかないで、そのままさっさとあるきました。吉兵衛というお百姓の家まで来ると、二人はそこへは行っていきま

した。ポンポンポンと木魚の音が  
しています。窓の障子にあかりがさし  
ていて、大きな坊主頭がうつって動い  
ていました。ごんは、

「おねんぶつがあるんだな」と思い  
ながら井戸のそばにしゃがんでいま  
した。しばらくすると、また三人ほど、  
人がつれだって吉兵衛の家へはいっ  
ていきました。お経を読む声がきこえ  
て来ました。

## 五

ごんは、おねんぶつがすむまで、井

戸のそばにしゃがんでいました。兵十と加助は、また一しよにかえっていきます。ごんは、二人の話をきこうと思っ  
て、ついていきました。兵十の影法師をふみふみいきました。

お城の前まで来たとき、加助が言い出しました。

「さっきの話は、きつと、そりゃあ、神さまのしわざだぞ」

「えっ？」と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。

「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃない、神さまだ、神さまが、お前がたった一

人になったのをあわれに思わっしや  
って、いろんなものをめぐんで下さる  
んだよ」

「そうかなあ」

「そうだとも。だから、まいにち神  
さまにお礼を言うがいいよ」

「うん」

ごんは、へえ、こいつはつまらない  
なと思いました。おれが、栗や松たけ  
を持って行ってやるのに、そのおれに  
はお礼をいわないで、神さまにお礼を  
いうんじゃないア、おれは、引き合わない  
なあ。

六

そのあくる日もごんは、栗をもって、兵十の家へ出かけました。兵十は物置で縄をなっていました。それでごんは家の裏口から、こっそり中へはいりました。

そのとき兵十は、ふと顔をあげました。と狐が家の中へはいったではありませんか。こないだうなぎをぬすみやがったあのごん狐めが、またいたずらをしに来たな。

「ようし。」

兵十は立ちあがって、納屋にかけて

ある火縄銃をとって、火薬をつめ  
ました。

そして足音をしのばせてちかよ  
て、今戸口を出ようとするごんを、  
ド  
ンと、うちました。ごんは、ばたりと  
たおれました。兵十はかけよって来ま  
した。家の中を見ると、土間に栗が、  
かためておいてあるのが目につきま  
した。

「おや」と兵十は、びっくりしてご  
んに目を落しました。

「ごん、お前だったのか。いつも栗  
をくれたのは」

ごんは、ぐったりと目をつぶったま



ま、うなずきました。

兵十は火縄銃をばたりと、とり落しました。青い煙が、まだ筒口から細く出ていました。